

「松下アジアスカラシップ」詳細

助成番号	研究テーマ(留学目的)		
	留学国	留学機関	留学期間
	氏名	所属	区分
00-010	近世中国民間地獄信仰における倫理観念 —俗文学・善書を中心に—		
	台湾	国立成功大学	
	香山聡子	京都大学大学院	院生博士

研究テーマ(留学目的)の説明 (助成決定時のテーマ。文責は本人)

申請者は、学部時代女性だけが落とされるという「血の池地獄」に関する擬經(中国で著わされた經典)「血盆經」に見られる女性差別の思想に疑問を持ったことから研究活動を始め、近年は明清期の俗文学(民間文学)、特に「宝卷」と呼ばれる語りもの文学の世界における地獄信仰と、女神としての観音による救済に関する研究を進めてきた。

これまでの一連の研究を通して、一見単純なく罪—罰>の因果律に支配されているかに見える地獄信仰にも、また選ばれた聖人としての超越者である神仏・幽鬼に到るまで、儒教のもつ社会倫理あるいは家族倫理の価値観がすみずみまで色濃く投影されており、むしろ仏教・道教の理論はその授業の価値観を補強するものとなりがちであるということがしだいに明らかになってきた。

民間信仰は民衆に支えられ、また逆に民衆を縛ってきたが、こと地獄信仰に関しては民衆に恐怖心を与え統御する力が強く、特にテーマとしてとりあげて研究しなければならないと考えている。できることならば地獄思想に根を下ろしている儒教の<孝道精神>に着目し、社会の最も小さな単位である家族内の倫理観、あるいは父親・母親—息子・娘の複雑に入り組んだ心理的関係を解きほぐしてみたく思っている。

申請者の関心は史実につぶさに記録されているような為政者の思想ではなく、名も無き民衆の行為を支える「思想」にあり、彼らの如き正史から無視された存在の「思想」を掘り上げるには、民衆がなじみ親しんできた俗文学、そして俗文学と不可分な芸能、民間伝承、小説などを研究することによって得るのが有効な方法の一つであるが、また宗教者(宗教世界における権威)あるいは為政者が民衆を教化するために配布した「善書」と呼ばれる宗教色の濃い道徳の読本の研究もまた非常に有効であると考えている。

このような、宗教でありまた社会規範でもあり、民衆をほとんど無意識的に動かす「思想」は、民衆を包み込むもつとも大きな価値体系であり、ひとり単なる迷信と言う意味での宗教的現象のみならず、政治、経済など社会全般に影響を及ぼすきわめて重大な根幹思想であるということはいうまでもないことである。

申請者の研究の方向は二つあり、一つは過去の地獄信仰の実態をより深く知ること、すなわち、文献——史書など正統的なものはもちろん、俗文学等の非正統的なもの——にいたるまで——を獵渉し、そこから倫理観念というある一定の法則性を見出し、また時代の移り変わりに伴った倫理観念の変遷をたどることである。

そしてもう一つは、現代になお生き残る地獄信仰、すなわち、善書、芸能、宗教儀礼などから、文献では辿りきることのできない地獄信仰の実態を探ることである。

この全体的な研究によってようやく総合的な地獄信仰の全容を明らかにすることができるであろうことを確信しているが、これを十二分に遂行するためには、宗教的研究及び宗教的行為が容認されている台湾という場を必然的に選ばざるを得ない。

成果報告書

助成番号 00 - 10

氏名 香山聡子	留学先国名 台湾	機関名 中央研究院民族学研究所
---------	-------------	--------------------

まず、筆者は当初台南市にある成功大学への留学を予定していたが、予告無く研究生（「選読生」）制度が廃止された。台湾では正規の学生以外の身分での留学はほぼ不可能であったため、外国人留学生に対して「訪問学员」という特別な身分を提供している中央研究院民族学研究所へ、急遽予定を変更して留学することとなった。台湾は首都と地方の格差が非常に大きく、そのために留学先の変更は筆者の研究計画にも少なからぬ影響があった。

また、筆者が強い関心を持っている伝統的宗教による庶民の倫理観念の形成に関して、台湾という場に長期滞在することによって初めて得られる情報（学術的なものから至極常識的なものまで）や経験によって、当初計画していた研究方法に関して大幅な方針転換を行った。

倫理観念形成を研究する上での核としていた地獄信仰について、留学前に日本での文献研究のみから得た知識によって立てた研究方針が、台湾で行われている信仰の実情とは少なからず乖離しているということ、台湾での研究生活を続けているうちに痛感するようになった。つまり、一般人にとって地獄信仰の存在は、倫理観念を形成し、あるいは再認識する場というよりも、むしろ死者の魂（鬼）や人を不幸に陥れる恐ろしい餓鬼のいるべき場所として強く意識されているということである。また近現代の台湾では、宗教者たち自身によって宗教の現代化が意識的に推進されており、地獄という迷信を使った倫理教育にはむしろ批判的な雰囲気もあることも判明した。無論諸宗教儀礼のなかでは地獄は意識されているが、現代化による伝統儀礼の衰退などの影響に加え、儀礼が行われる季節（旧暦7月に集中している）や地域（台湾南部に多い）などの強い制約などもがあるため、地獄信仰の研究には、相当の時間を要するであろうこともわかってきた。

倫理観念形成という枠組みのなかで研究していくためには、地獄というテーマ一つだけでは不十分であると判断し、死後の世界よりも現世での利益を重んじる台湾人にとって、より強く意識されている因果応報という広い主題の中から、「護生」（不殺生、あるいは全ての生き物に対する慈しみの念）という項目を選び出し、地獄信仰と平行して進めていくこととした。台湾にはきわめて多くの肉食主義者が存在し、その多くは「護生」あるいは「不殺生」という仏教的宗教倫理を理由としている。また、台湾では「護生」を現代の環境問題に関連する概念として再評価しようとする動きがあり、実際に多くの団体（いくつかの宗教団体も含まれる）が積極的に活動しているため、非常に興味深い様相を呈している。筆者は留学の後半から、この「護生」という伝統的な倫理観念を第二の研究テーマとして調査を開始した。

以下に具体的な成果と言えるものを述べていく。

まず、筆者の研究の大きな目的の一つである文献収集に関しては、中央研究院という非常に恵まれた場に拠点をおけたこと、歴史的文献や学術論文、そして関連書籍や古書などを十二分に収集することができた。とりわけ台北は台湾の中でも学術情報が一極集中しているきらいがあり、そのことが文献収集については非常に大きな成果をもたらした。

筆者が特に集中して収集していたのは「善書」という、寺や廟などで信者達の手によって無料配布されている一般人向けの宗教書である。この種の書物は信者達の寄進を資金源として出版され、信者達自身によって各

寺廟の専用の書棚に置かれ、そしてまた誰かがその本を持ち帰るといった形式で流通しているため、金銭で売買される書物とは流通の方式が根本的にことなっている。また、無料であるがためにつぎつぎと消費され消えてゆく運命にあるため、虱潰しに収集して行くより他に、重要な書物があったとしても入手することは非常に困難である。筆者は台北市内や郊外の寺廟を定期的に巡回してこれらの書物、とりわけ地獄信仰や護生に関連する物を収集した。また、善書が一部の研究機関や博物館などの図書室に所蔵されている場合や、比較的大規模な宗教団体の私設図書館などにも所蔵されている場合があるという情報を得、各所へ通ってコピーやデジタル写真撮影、筆写などを行った。また、このような作業を通して、偶然に個人的な収集家数人と知り合うことができ、その私蔵コレクションを拝見させていただき、同様に複写の作業を行った。この収集家の中には自身で善書の出版と配布を行っている方もおられ、彼らから善書の流通についてかなり専門的な知識も知ることができた。集めた善書は、現物にコピーやCDRなども併せて2年間で段ボール箱10箱近くにのぼり、善書の保管のためにもう一部屋借りなければならないほどであった。地獄に関する物は種類があまり多くなく、因果応報や護生に関するものについては、驚くほど多く採集できた。

収集したこれら膨大な量の善書の整理と分析の作業に、留学中は非常に多くの時間を割き、それは現在もお継続中である。善書には、高尚な宗教思想に関するものから、極めて土俗的な民間信仰に関わる物まで、内容は非常に幅広い。とくに民間信仰の実相を知るには非常によい資料となる。

現地調査としては、筆写が文献研究の出身であるというハンデキャップがやはり響き、留学の前半においては調査地の選定にすら手間取るような状態であった。そして台湾語が話せないこともまた、聞き取りの支障となっていた。とにかくも、地獄に関連する宗教行事には寺廟の大小にかかわらず出来るだけ多く見学し、出来る限りの写真撮影や聞き取りを試みた。特に、台北市内の保安宮、台南市の東嶽殿における地獄に関連する儀礼は、非常に意義深いものであった。どちらにも、不幸にも地獄に落ちてしまった近親者を救い出すという構造が共通しており、保安宮の場合は死者により良い来世を得させるため、東嶽殿の場合は、地獄に堕ちた近親者の祟りを解決するためだという。台湾人の地獄に対する意識の一面を非常によく理解することが出来た。しかしながら、これらの儀礼に関しては、すでに台湾で数多くの研究業績が存在しており、よほどアプローチの方法を練り直さなければ新しい研究を切り開くのは難しく、これらの儀礼に関しては、これからも出来る限り毎年参加して新しい切り口を開きたいと考えている。なお、仏式、道教式の葬儀に関しては、残念ながら調査する機会に恵まれることがなかった。

一般人の意識調査に関しては、善書の収集先である寺廟にあつまっている人々などにも聞き取りをしていたが、非常に流動的で効率が良くなかったため、固定した調査地が必要だと感じ、調査に相応しい宗教団体を選定した。指導教官の紹介に頼らず出来るだけ自分で調査先を捜すことを意識し、知人が入信していたある大きな仏教団体を介して信者に聞き取りを行おうとしたところ、寄付や入信を暗に強要されることに疑問を感じ、度々社会問題を起こしている団体であるということをややよく知って、その団体での調査を中断せざるを得なくなった。進みかけていた調査が振り出しに戻るといった非常に辛い経験をしたが、これによって、宗教の研究調査の難しさや、外国で調査する時の予備情報収集の難しさ、そしてフィールド地の選定に関する大きな教訓を得た。次年度において、また他の知人から、台北郊外にあるH仏教学院という非常に社会的評価の高い仏教団体を紹介された。この団体は筆者の調査に非常に好意的かつ非常に自由にさせて下さった。週の半ばをこの寺院に住み込ませていただくことを許可して頂き、寺院の生活を体験しながら聞き取りをす

すめることができた。

調査においては、大勢の人に一齐にアンケート調査を行うという事は避け、個々人にインタビューする形式での調査を主に行った。地獄に関する意識調査では、高年齢層や熱心な仏教徒の一部が地獄の存在を意識しているという回答を少数ながら得た。幼少期のしつけとして近親者から地獄の存在を強調された例、民間信仰の枠組みに沿って地獄を意識している例、宗教者の説法から信じるようになった例などである。しかしながら実際に採集できた事例は非常に少なく、まして仏教の現代化を標榜しているH仏教学院では、出家者・信者とともやはり地獄は迷信であるという回答しか得られなかった。地獄に関する意識についてははっきりした結果が得られなかったと言えるかもしれない。

しかしながら、護生の観念については非常に大きな成果を得た。このH仏教学院では護生や環境保護に関して非常に積極的な活動を行っており、外郭に動物愛護団体も擁している。出家者・信者に対するインタビューから、現代台湾人の護生に関する様々な意識を知ることができた。特に、最も容易かつ日常的な護生の方法としての菜食の習慣について調査を試みたところ、その根底には、正統仏教の思想のみならず、非常に民間信仰的な因果輪廻や鬼魂、転生などの迷信の影響をうかがい知ることが出来、同時に現代的な欧米の生命倫理観念も色濃く影響しており、非常に複雑かつダイナミックな様相にますます興味をそそられ、研究に着手して以来はじめてと言ってよいほどの非常に大きな手応えと喜びを感じている。

この他に、成果として得られたことを挙げてみる。

中央研究院という特殊な場所にいたことで、各国のさまざまな研究者と学術的な交流を深めることができたこと。これは通常の大学などに留学していればおよそ得られない機会であった。この交流により、研究に必要な情報が、飛躍的に獲得しやすくなった。留学中に出会えた多数の研究者と、現在もお交流が続いている。

今後、台湾で研究を続けていくための、細々としたノウハウを一通り体得できたこと。

なんとか通訳を介さずに聞き取りができる程度に北京語が上達したこと。ただし台湾語に関しては訓練が足りず、上達しなかったことを反省している。

言語交換や友人を通じて知り合った台湾人の親友が大勢できたこと。彼らは非常に親切で、困難にぶつかったとき度々助けてくれた。この友人達の多くは筆者に近い立場の大学院生やポストドクターであり、研究生活や日常生活で困った時、互いに常に助け合う関係を培った。

筆者の研究は、SARSの流行によって一旦中断する形となったため、このアジアスカラシップによる助成が満了した後、自費にて留学を継続することにした。善書の収集と整理・分析、そしてH仏教学院やその外郭団体を中心とした調査は今なお続いている。地獄に関する研究は遅々として進まないが、台湾で暮らすうちに新たに見出したテーマが増えたことで、却って研究に対する苦しみが少なくなったと感ぜられるようになった。

筆者が台湾への留学を志望した当時は、奨学金や学制などに関する諸制度が整っていなかったため、台湾は非常に留学しにくい場所であった。アジアスカラシップを受給することで、かろうじてその困難を乗り越え、念願であった台湾留学が実現し、2年間の決して順調ではない留学生活を支えていただいた。このような貴重な機会を頂戴できたことを心より感謝し、この機会を一生の財産として、無駄にすることがないように、今後、研究の長い道のりを、研究の完成に向けて、ゆっくりと確実に進んで行きたい。